愛しのM妻
――もっとシバって落書きを！――
「体験版」

「ご挨拶」

　この度は、「愛しのM妻　――もっとシバって落書きを！――」体験版をご鑑賞下さりまして、誠に有難うございます。

　体験版は製品版の一部を抜粋した物です。分量は全部で３４ページ（内、挿絵が４ページ）です。

　このPDFの小説は、ページの表示方法を「見開き」、表示される大きさを５０％前後、に設定されると見易くなるかも知れません。宜しければお試し下さい。

　尚、製品版は分量が１６８ページです。その内挿絵が２０ページ（基本５枚、差分込みで１８枚、立ち絵２枚（未使用の１枚含まず。未使用の１枚は製品版に同梱のCG集に収録されております。））となっております。

　製品版には小説の他に、使用した挿絵を纏めたＣＧ集（８００×６００サイズ、ＢＭＰ形式）もお付けしております。

　ご検討頂けましたら幸いです。

木森山　水道（夜山の休憩所）

目次

第一章　夫の回想……三
第二章　写真の妻（体験版はここまで収録）……五
第三章　妻に見られて……三四
第四章　続、妻に見られて……六五
第五章　清算……一〇六
第六章　新しい妻……一二八

登場人物紹介

妻　主人公の妻。明るい性格の良妻。夫に言えない悩みを抱えている。
女課長　主人公の上司。仕事が出来る上に気さくで人望もあるが、バツイチ。
彼女　女課長の友人。変態的な性癖の持ち主だが、気立ての良い出来た女性。
主人公　会社員。愛妻家なものの、妻に言えない秘密を持っている。

第一章　夫の回想

「宜しくお願い致します」
ベッドの上で三つ指をつき、初対面の彼女は深々と頭を下げた。満遍なく――大事な部分以外が――晒された白皙の裸体が、ほんのり桃色を帯びている。
「これを。どうか、思う存分お書き下さい……出来れば思い切り野卑に……」
脇に置いていたワインレッドのサインペンを恭しく差し出してくる。水性なのか、油性なのかが書かれているであろう箇所が、何故か削り取られていた。背後が気になって仕方無いが、ともかく受け取った。
「あぁ、一体どんな落書きをして下さるのでしょう……やっぱり初めは『変態』辺りかしら……オーソドックスだけれど、考えただけで身体が熱くなってしまう」
睫毛を伏せ、恥じらいながら、弾む吐息と一緒に言葉を紡ぐ。
子玉スイカを上回るボリュームの乳房がゆさゆさ揺れている。彼女が身体を揺すっているからではなく、興奮で心臓がドクンドクン脈打っているからだろう。
「あんな素敵な奥様がいらっしゃる旦那様に相手をして頂けると思うと、背徳感も感

じてしまう・・・・・いけない、そんな事を思っては・・・・・」

自分には妻がいる。だが今は、他の女性と肌を重ねる事と・・・・・妻にも秘密にしていた願望――女性の身体に卑猥な落書きをする事――を求めるのを許されている。

ゴクリ・・・・・。

意識せずに喉が鳴った。これは酷い誘惑だ。酷く甘美な誘惑だ。

気立てが良さそうな上に容姿端麗の女性が、身体を肉のキャンバスとして差し出している。何にも強制されていない。ただ、そう言う趣味があると言う理由だけで。

ベッドの上の彼女は、俯きつつも背筋をピンと伸ばして正座している。時々こちらをチラチラ見てくる。瞳は潤んでいる。妻帯者が他の女の身体に性癖をぶつける瞬間を今か今かと待っていると思えた。

ろくに知らない男を受け入れてくれる姿勢、美しい女性に受け入れて貰える事実が胸を熱くし、欲望を滾らせる。

だが、意識せずにはいられない。背後の妻を。しかも、この場にいるのは彼女だけではない。会社の上司である女課長もいる。思いのままに振舞う事が躊躇われる。

どうしてこうなったのか。思えば、あの頃から奇妙な事が続いていた。

その時、また妻の愛らしい声がした。

第二章　写真の妻

「おはよう。良く眠れた？」

日付が変わった頃に帰宅し、その数時間後に起き出した。締め付ける様な頭痛が頭の片隅に起きており、舌が苦くて不快だった。だが、太陽にも負けない明るさに迎えられると気にならなくなった。妻の事だ。

食卓に朝食を並べていた妻が、そのつぶらな瞳を向けてくる。ショートカットの髪が朝日の中で輝いていた。

Tシャーツとgパン、その上に飾り気の無い簡素なエプロンと言ういでたちが、彼女の快活でさっぱりした性格を表している。

シャツに押し込まれた丸まりは、今日もふっくらと豊かだ。その下に、重力に逆らう見事な丸まりがある事を、夫の自分は良く知っている。

シャツとパンツの境目の引き締まりは、まるで砂時計の細さだ。冬でも無い限り、その輪郭がまるで見えなくなる事はない。

下半身に位置して後ろに突き出す膨らみは、胸に勝るとも劣らない。大人の男であ

る自分が鷲掴みにしても、なお余りあるサイズなのだ。
「どうしたの？　ぼうっとして。具合悪い？」
手を止め、怪訝な顔で近づいてくる。額にかかる自分の綺麗な髪と、寝起きでボサボサな夫の髪をそれぞれかき上げ、額をコツンとくっつけた。
「やだ、少し熱っぽい・・・・・どうしよう、会社休めないんでしょ・・・・・」
温もりを帯びた、ほんのり甘い吐息が顔にかかる。心身の蕩ける心地がした。
「あんまり寝てないってだけだよ。心配しないで。それよりも、いつも世話を焼いてくれてありがとう。最近、仕事で構ってあげられていないのに」
「そんな事・・・・・私達は夫婦じゃない。妻として、愛する旦那様に尽くせるのは喜びなのよ。・・・・・でも、出来たら、どこかに泊りがけで遊びにいきたいかな。二人で」
ただ愛していると言うだけで、献身的に尽くしてくれる。これと言った見返りを求めずに。このいじらしい女性と通じ合えた事は、人生最大の幸運だと考えている。
そして、奢る事無く、この幸運を逃がさない様に努力をしなければならない。自分も出来る限り彼女に尽くすのだ。
胸がほうっと温かくなった。疲労で淀んでいた心身が軽くなった。頭痛も苦味も消えていないが、大した事ではない。

「たくさん食べて、今日もお仕事頑張って。お弁当と緑茶を用意しておいたから、持っていってね、旦那様」

カチッ。

時計の音がやけに高く聞こえた。示す時刻は夜の九時。

オフィスにはもう、自分以外に誰もいない。昼間の騒がしさが嘘の様だ。静寂が満ちている無機的な空間は、煌々と蛍光灯に照らされていても物寂しい。

「一息つくかな」

書類作成がキリの良い所に来た。仕事は詰めの段階なのだから、余計に慎重にならないといけない。その為には食事をとる必要がある。心身に栄養を送る為に。半日ぶりに食べ物を口にする事にした。

弁当箱を二つ取り出す。妻はいつも昼食用と夜食用を用意してくれている。昼はともかくとして、夜は夕食を作って帰宅を待っている癖にだ。その上、入浴の準備も、就寝の準備も万全にしている。そして、連絡をしない限り待ち続ける。

食事を意識すると途端に疲労と空腹感に襲われた。今なら、どちらも簡単に平らげられそうだ。彼女への連絡は一心地ついてからにしよう。今だと、きっと声が擦れて

いる。無駄な心配をさせてしまうかも知れない。
ふと思いついて机の引き出しを開けた。中には写真立て。まだ余暇を取れた頃、妻と二人で行った高原の林で撮った物だ。
Tシャツにスパッツと言うラフな格好の彼女が、木々の間から燦燦と降り注ぐ陽光の中で照れくさそうに微笑んでいる。
自然に破顔した。と。
カチャ。キーッ……バタン。
「あ、課長、お疲れ様です」
帰宅したとばかり思っていた、美貌の女課長が訪れた。いつもと変わらず、パリッとした皺一つ無いグレーのスーツを着こなし、周囲に凛とした空気を漂わせている。
柔和に弛んだ切れ長の目、真っ赤なルージュが施されたぽってりした唇。後ろで纏められている緩いウェーブがかかった髪。どれも柔かい性格を際立たせる要素なのだが、同時に近づき難い神聖さを感じさせる。
ピッチリしたスーツは豊満で丸い乳房のラインを浮き上がらせ、タイトスカートの中には、胸にも劣らない押し込められた膨らみ。男性社員のみならず、同性にも溜息を吐かせるプロポーションだ。

魅力は外見だけでない。仕事ぶりは誰もが一目置いており、部下への気配りも十分してくれる。また、護身術の心得があるそうだ。偶然出くわした路上窃盗の現場で犯人を取り押さえて感謝状を送られた事がある。今も色あせない社内外の語り種だ。

「お疲れ様・・・・・あら、綺麗なお弁当。愛妻弁当なのね。その写真の女性は奥様ね。こんなに可愛らしくて、家事もお上手そうで。おまけに夫想い。羨ましいわぁ。私にもそんなお嫁さんがいてくれたらねぇ」

疲れた頭では上手い返し方が思いつかない。性格がたおやかで容姿端麗、能力が優秀と出来た女性ではあるのだが、女課長はバツイチである。迂闊な事を言えない。適当な相槌を打つしか出来なかった。

女課長は話を続けなかった。「これから一仕事あるから、私も腹ごしらえさせて貰うわね」と言うと、自身の机に向かった。鞄から、缶コーヒーと市販のサンドイッチを取り出していた。

それきり、女課長から目を放した。写真の中の妻と共に、彼女が用意してくれた食事をとった。食後のお茶を啜りながら、そろそろ妻へ電話をと思った時だ。

「あら、何かしら？　あなたの足元の。あ、動いた？　生き物なのかしら」

不意に課長の声がした。二人きりなのだから、『あなた』とは自分の事だ。何事か

と思い、席を立った。

カチャ。

まるで南京錠が施錠された様な、後に残る金属音がした。と同時に手首に軽い圧迫感が起こった。そして、掴まれ、捻られ、また例の音。

「両手に手錠をかけられた・・・・・？」

背後で纏められた両手首同士を放そうとすると、軽い金属音と共に痛みが走る。殆ど離せない。

「大人しくしていてね。悪い様にはしないから」

足を払われた。支えを無くした身体が舞う。がその直後、背中にふにっと柔かい感触。課長が抱きとめた様だ。そしてそっと床に下ろし、両足首をカチャリ。

「何をするんです？　まるで訳が分からないんですが」

こちらを見下ろす彼女を見据えて訊ねる。女課長は答えない。ゆっくりと自分の上着を脱ぐだけ。

蛍光灯が逆行になっているせいで良く見えないが、どうも表情がおかしい。ついさっきまでの柔和な顔が艶然としている気がする。柔かく歪んだ唇が、そんな動作はしていないのに、舌なめずりをしている風に見えてならない。

「本当は分かっているんでしょう？　内心では期待しているくせにとぼけちゃって」
ハッとする程濡れた声。衣服を全て脱ぎ、手近の机に置き、ゆっくり顔を近づけてくる。はっきり見えなかった頬が紅潮している。明確に。
「駄目ですよ！　これって立派な・・・・・・タチの悪い暴行です。それに、僕は妻帯者ですよ？」
「勿論知ってるわ」
こちらを見ていた瞳が、写真立ての中で照れくさそうにしている女性を捕らえる。
「凄く愛されている旦那様の、奥様にしか許されないものを幾つも頂けるなんて・・・・考えただけで背筋がゾクゾクしちゃう」
震える自分を自分で抱きしめながら、うっとりと微笑んだ。露になった裸身は雪の白さと、血の桃色で輝いていた。染み一つ無く、きめ細かな肌で作られた女体が、背徳の興奮に染まっていく。
後ろで纏められていた髪がパサリと落ちた。緩いウェーブがかかった長い髪が、白い裸身に絡みつく。
ゴクリ・・・・・。
思わず生唾を飲んでしまった。蛍光灯を背負う女課長はとても魅力的だった。覆い

を無くした乳房は、やや垂れて紡錘形をしているがその量感は息を呑む程。先端の突起は既に硬く立ち上がっており、しがない自分に興奮した為と思うと息苦しくなる。

こちらを見下ろす目は、まるで獲物を完全に支配下に置いた獣のそれ。妻がある身と思えば思うほど、身体を委ねてしまいたい、めちゃくちゃにされたいと言う黒い欲求が湧き起こる。才色兼備の女性が自分を前にして昂ぶっているのでは尚更だ。

「いい子ね。そのままじっとしているのよ」

興奮の呼吸で上下する腹部に腰を下ろし、上半身をゆっくり倒す。すがりつく格好で、女課長は妻帯者に密着する。獣の目が間近に迫り、ルージュを引いた唇から漏れ出る熱い吐息が首に断続的にかかった。

ペロリ・・・・・。

真っ赤な舌が頬を舐めた。ひと舐め。ふた舐め。無精髭の肌が、妻でない女性の唾液でべちょべちょになっていく。

生々しい甘さを帯びた興奮の吐息や、控え目な鼻穴から出る息に含まれる蒸気も顔の他の場所をほんのり濡らしていく。

「お顔がどんどん、私の体液でコーティングされているわよ。奥様から、ほっぺたにキスされた事もあるのでしょう？　それを私が塗り替えているのよね」

一際熱い息がかかった。胸の奥がドクンと大きく鳴いた。夫が身体を委ねるべき女性は、妻ただ一人だ。それなのに、他の女性に押さえつけられて、舐められて抵抗をしない。それはあまりに不義理だ。

しかし、そう思うと身体が粟立ってしまう。ゾクゾクと言う昏い快感が、心身を覆いつくしていく気がする。女課長の寵愛を受ける事は妻を裏切る事だ。けれども、その罪を犯して一方的に責められたいと思ってしまう。

女課長は自分に妻がある事を知っている。写真立ての中の妻をはっきり見ている。それでもこうして性愛行動をしていると言う事は、自分を寝取りたいと思っているのではないだろうか。

寝取ろうとしている女性に身を捧げる。妻の目が届かない所で、妻を裏切る。

「あら、もうこんなにして。いけない旦那様ね」

桃色を過ぎて赤い下半身が蛇のうねりを見せる。許されざる興奮に捕われつつあるオトコを、更に狂わせてやろうと積極的に誘惑してくる。

上半身も遊んでいない。柔かい肉果実を、Yシャツで隔てられた胸板にぎゅうぎゅう押し付け、あるいは擦り付ける。生地の硬さやボタンのせいで痣が出来てもお構いなしだ。

頬を塗り替えていた赤い口は、半開きの口に重なり情熱的なディープキスを展開する。ちゅぱちゅぱ、じゅるじゅる、ちゅぽんっ！　じゅぽんっ！　と言う水音が間断なく、二人きりのオフィスに木霊する。

熱く盛り上がる股間を衣服越しに擦られると心が蕩ける心地がする。ずっと仕事漬けだったせいで精液が大分溜まっている。その全てを、誘惑者の、不義を働かせようとする魔性の女性の手で出させて貰えたらどんなに気持ちいいだろうか。

上半身でしきりにアピールする豊胸はどうだろう。服越しにコリコリ当たる乳首にむしゃぶりつけたら、この胸でオトコに尽くして貰えたらどんなに爽快だろう。

口では、女課長の舌がぴったりくっつきながら右へ左へスライドし、口内の隅々まで嘗め回していた。頬を窄めてずずっと吸い込み、妻帯者の唾液を美味しそうに飲み下す事さへしてくれる。

欲望でぼやけた頭は、それら全てに迎合せよと身体に指令を送る。自分から一体になろうと意識すると、快感は倍増した。唯一自由に動かせる舌が指令に従い、我が物顔でくねる舌とふしだらなダンスを繰り広げる。

互いに快感を与え合う甘さを知ると、欲望が肥大していく。柔かい身体を抱きしめたい。舐めたい。しゃぶりたい。一つになりたい。手足を拘束され、どうせ抵抗でき

ないのだ。それならいっその事――。

「さぁ、奥様に良く見て貰いましょうね。この可愛い奥様に」

目の前に、写真立てを持ってくる。愛妻を目にした時にハッとした。自分は何をしようとしていたのだろうか。同時に、空のランチボックスと水筒が視界に入った。意識が完全に覚醒する。

「もう止めて下さい。妻を裏切らせないで下さい。それにこれは犯罪ですよ。どうしてこんな事をするんですか、課長」

「・・・・・あなたはもう逃げられないの。諦めて楽しんだ方が得よ？」

「嫌です。何をされても、妻を裏切りません。絶対に」

決意を言葉にして吐き出した。欲望に負けて、自分はとんでもない事をしようとしていた。他の女性に身体を許し、他の女性を求めるなどと言う大罪を犯したら、もう妻と会う事は出来ない。それは破滅と同じだ。

「堅苦しく考えないの」

怯んだ様子がまるでない。駄々っ子をあやす母親の顔で、豊かな胸を擦りつけ続けたシャツのボタンを一つずつ外す。終わると下着を捲り上げた。昂ぶりで汗ばんだ胸板が露になる。その次は下半身だ。膨らみきった勃起が飛び出た。

さわさわ……さわさわ……。

触れるか触れないかの位置を維持し、細い手の平が上半身を這いずり回る。胸に円を描き、乳輪を指の腹で執拗になぞり、爪の先で乳首をクリクリ抉る。

「妻は裏切らない」と明言した口から、くぐもった呻きが漏れる。喉からの声でなく、腹の底からの、熱い息を帯びた喘ぎだ。愛する妻を、ついつい狂おしく求めた時でも、こんな獣じみた声を出した事など無い。

妖しく微笑む女課長は、親指と人差し指と中指で勃起の先端を掴み、押し倒し、自身の股間で押さえつけた。ビクンビクン脈動する肉棒が、硬くて柔かいあわいに馬乗りにされる。完全に押さえ込まれた。悲鳴の震動が下腹部に伝わってくる。

下半身を支配下に置くと、肉土手のレールで押さえていた、肉欲に猛るオトコを何度も何度も往復させる。性交らしい性交をしていないと言うのに、肉唇のレールには十分な量の潤滑油が差されていた。しかも後から後から追加され、一向に涸れない。

「どう、気持ちいいでしょ？　ん？」

執拗に腰を振りながら問いかけてくる。バランスをとる為に両手を両胸につき、指で乳首をこしょこしょと刺激する事も忘れずに。

正直、気持ち良かった。

上半身と下半身の性感帯を同時に責められて、頭が真っ白になっていく。それに比例して、射精欲求が蓄積していく。このまま射精できたらどんなにいいだろう。欲望に呑まれてはいけないと思い、妻の顔を頭に浮かべようとしても上手くいかない。

それを自覚すると、必死になって、写真立ての中の妻を瞳に収める。身体は意思の制御を離れてしまうかも知れない。けれども、心までは。

「秘密にしていれば奥様に知られはしないのよ？　あなたは被害者なのだから、それを利用したらどうなの？」

抵抗を止めて堕落しなさいと、美しい魔女が誘惑する。さっきまでなら、被害者を装って背徳の快感を貪っていたかも知れない。でも今は。

刹那。ほんの一瞬だけ、魔女が困った顔をした気がした。裏切りを誘う妖艶な悪女ではなく、普段の優しさが混じった困り顔。と、

グチュリ……じゅじゅじゅじゅ……。

愛液に塗れてヌラヌラ光る剥き出しの亀頭が、熱い肉のぬかるみに呑み込まれていく。妻と一つになる時に感じる肉体的な気持ち良さに襲われる。

「強情ね。だったらこれでどうかしら。コレで満足しない男はいなかったわよ」

ヒダヒダの一本一本が抱きついてくる。きゅうきゅう密着し、ざわざわとくすぐっ

てくる。ひときわ敏感な先端へかかる快感が強烈だ。目の前がチラチラする。背筋が仰け反るのを抑えられない。全身の粟立ちと共に起こる震えが止められない。

「いいでしょ？　ん……すごい、奥まで届いた……あは～……」

柔かくも怜悧な面差しが淫らに歪む。紅潮した頬の上に位置する目尻が緩みきり、だらしなく開いた口の端からはツーッと一筋の涎が。感極まったのか、直ぐに天井を向いた。赤いルージュの口が小刻みにパクパクしている。

感じているのだ。あの女課長が。自分と繋がる事で、あんなにも乱れている。

「あぁ、いいわぁ……こんなに素敵だなんて、奥様が憎らしい……でも、今これは私だけのものよ」

写真の中の妻に、いやらしい笑みをくれてやると、腰を振り始めた。今度は、空いている指で乳首を弄る事をしない。ハシッと両手を固定し、腹の横につけた脚を下品に踏ん張らせ、体勢が崩れない様にしてガンガン腰を振る。

長いウェーブ髪が奔放に跳ねる上下運動、クイクイ振りたくる円運動。ぐっしょり濡れた媚肉の隅々まで使い、迎え入れたオトコを喜ばせる。オトコの隅々まで甘く刺激してやり、射精欲求を促してくる。

「あら、もう限界なのかしら。私のアソコがが収めているモノのこのビクつき具合は

イく寸前よね。分かるわよ、経験豊富だから」

勝ち誇った笑みを写真の妻に送り、腰振りを早める。

「我慢しないで射精して、ほら、もう限界なのでしょう？　そこの奥様に、他の女とのセックスで気持ち良くピューッてしちゃう姿を見せてあげて」

幼い子供に言い聞かせる声音で、妻帯者に不義の射精を勧めてくる。責める手も緩めない。淫らな水音と、肉同士がパンパンぶつかりあう音を一層高く奏でる。

我慢するんだと心で身体を叱りつけても、こみ上げてくる濁ったマグマが全然鎮まらない。少しでも身体を冷やそうと短い呼吸を繰り返しても、身体の熱が引かない。最後の瞬間を回避できそうにない。

背筋が、射精寸前の甘い痺れを伝えてくる。妻にだけ許すべき精が、亀頭まで上ってきている心地がしてならない。

眉目秀麗、才色兼備な魔性の女課長に魅了された何億もの精子達が、一刻も早く自分達を外へ出させろ、この柔かくて気持ち良い女の卵子へ突撃させろ、と叫んでいる気がしてならない。もう限界だった。

「ごめん」

せめてこれだけはと思い、傍らの妻に謝った。

「うふふ、さぁ出して、濃いのをたくさん、溜っているのでしょう、さぁ！」
屈服の言葉を聞きつけた女課長は気色満面だ。とどめとばかりに、自分の子宮口と亀頭の先端を何度も何度もぶつけ合わせる。ガツンガツンと言う何度目かの快感の衝撃が心を揺らした時――。
ビューッ！　ドビュドビュドビュ！　ビュクッ、ビュビュビュビュッ！
とうとう出てしまった。視界が真っ白に染まる射精快感に襲われる。精液の爆発と共に、妻への操を守ろうと言う気持ちまで抜け出していく気がする。鮮烈な肉悦だ。
「あ……出てる……凄い濃いのが……ネバネバが私の子宮口を叩いて……」
下腹部にペタンと腰を下ろし、遠くを見ながら、噴き上げる奔流を全身で感じている。赤く変色したなめらかな肌がピクピク震えている。
「奥様しか感じる事を許されないものを、私が感じて……奥様しか貰えないザーメンを私がドクドク出させて、受け取めてる……はぁぁ……」
上擦った艶声を上げながら忘我の境地を漂っている。
「んんっ……旦那様の射精、とても宜しいですね、奥様……大した精力ですよ……」
写真の妻に向かって、ニンマリと微笑んだ。
「こんなに出したのにまだ硬くて……」

名残惜しそうに呟いて、結合していた下半身を上に外す。
くぽぁ……こぽぉ……どろり……。
肉厚な二枚の花びらを指で開く。眼下の部下に注がせた、濁ったとろみを重力にのせる。粘り気たっぷりのそれがゆっくりと垂れた。
「見て、キミのザーメン……こんなに私にくれたのよ……繰り返し子宮口に当たる感触は本当に良かったわ……ちょっとイっちゃった」
次いで、写真立ての中の妻を見せ付ける。
「見て下さい、奥様……旦那様ったらこんなに出して下さったのですよ？　気持ち良さそうな顔でイきながら、たっぷり出して下さったんです。妻以外の女に。本当なら、奥様しか貰えない子種汁を……夜のお世話を疎かにしている罰です」
「妻は……求めれば喜んで応じてくれます。溜っていたのは、仕事にかかりきりだったからですよ……幾ら貴女でも、妻を侮辱するのなら許しません」
「そう。でも、どう許さないのかしら。そんな有様なのに」
手足は依然として拘束されているままだ。確かに、何もできない。けれども、睨む事くらいは出来る。女性を、しかも人として好意を抱く女課長を睨むなんて事はやりたくないが、妻を――あんな良い女性を悪く言われる事は我慢できない。

女課長は視線を受け止めた。目を細めて、じっと。
少しの間そうしていたら、ふっと笑った。嫣然と。
「こんなに妻想いの旦那様とセックスしているのね、私は」
胸の一点に鈍い痛みが走った。その痛みは一度で終わらず、二度三度と違う場所で起こり続ける。キスマークをつけられているのだ。赤い痣と、唇を彩るルージュの真紅が混じった花弁。それが次々に刻まれていく。
「どんなに奥様を想っていても、今この時は、キミは私のものなのよ。その証を残してあげる。本物の奥様がご覧になったら、どんな顔をするのかしらね」
また、写真の妻に勝ち誇った笑みを向けた。
「そうだ、こんなのはどうかしら」
脱いで手近の机に置いていたスーツのポケットの中から、赤色のサインペンを取り出した。キャップを取り、興奮の色に染まった肌に躊躇いなくペン先をつける。
なだらかな谷を形作る下腹から、下へ向かって線を引き、そうして矢印を完成させる。思わず息を呑んだ。自分で自分の身体に落書きをしているのだ。
こちらを一瞥すると、ニヤリと笑った。してやったりと言わんばかりの笑みだ。また手を動かした。今度は、たどたどしい字で『メスブタ』と書ききった。

ゴクリ……。

生唾を飲んでしまった。自分の身体に卑猥な落書きをした女課長の赤い唇が、笑みの形へと静かに歪んだ。

「そんなに似合うかしら。愛妻家の旦那様に、身体を使って不実を働かせようとする女は……ましてや、そうして心と身体の底から喜んでいる女なんて、『メスブタ』以外の何者でもないとは言え」

ほっそりした指で、未だ萎えない勃起の先端を掴んだ。ヌラヌラと言う光沢を与えている愛液と精液の混合液はまだ乾いていない。それを、掴んだ指にまぶしてさわさわと弄ぶ。勃起が急速に敏感になっていく。

下半身を遊ばれている事も原因だろうが、ここまで快感を感じてしまっている理由は他にある。落書きだ。

下腹に書かれた、オンナの部分へと伸びる矢印と、その起点にかかれた『メスブタ』と言う単語。それらから目が離せない。先刻まで、意識して見まいとしていた女課長の顔を見てしまう。落書きと交互に。

こんな綺麗な女性が、自分の身体に野卑な落書きを書いたのだ！　それまで自分がされていた事が殆ど吹き飛んでしまっていた。

愛する妻にも内緒にしていたのだが、自分は、自身の身体に落書きが施されている女性にどうしようもなく興奮してしまう性格なのだ。

そう言う雑誌を、自分は隠し持っている。交わりを求めれば応じてくれる、可愛らしい妻がいると言うのに、時折……いや時々、彼女との蜜事よりもそれを見る事を求めてしまう。それ位、好きなのだ。

妻に秘密を持つ事は負い目だ。けれど、打ち明けられる筈はない。きっと嫌われてしまう。そう考えただけでも胃が重くなる。だから、自分だけの秘密にしている。これ位は、妻を裏切っている内には入らないと、自分に言い訳をしながら。

ぐちゅり……。

弄んでいた先端をオンナの入り口にあてがい、そのまま課長は腰を沈めていく。再び、妻以外の女性と、深く繋がっていく。

「す……ごい……一度射精しているのに、さっきよりもビキビキって……んはぁあ……硬くて太いのに、逞しく押しのけられていくのが分かる……」

コリ……。

「はぁぁぁあああ……子宮口にぶつけると、ビクッてきちゃう……！」

享受する満足感を思う存分声に出す。目尻が法悦の涙で濡れている。睫毛がヒクヒ

ク上下している。
快感が大きいのはこちらも同じだった。大好きな要素が加味されたのだ。ずっと秘めている大好きな要素が加わったのだ。
「動いたらどうなるのかしら」
ゆっくりと腰を振り始めた。緩いウェーブがかかった幾筋もの髪の束がうねる。
『メスブタ』と書かれた文字と、『矢印』が上下に揺れる。
「はっ、はっ、いいわ、いい。二回目なのに、さっきよりもはっきり感じちゃう」
息が弾んでいる。一度目は、余裕を持ってこちらを嬲っていた感があったが今は違う。夢中になって快感を貪っている風に見える。
普段、昼間のオフィスで見る理知的な顔が見る影も無い。うっすらと涙を流しながら、淫蕩な微笑みを浮かべ、足を踏ん張り、いやらしく腰を振る浅ましい女だ。
落書きを施した、そんな性感に従順な女の姿に、自分も昂ぶってしまう。心まで妻を裏切ってなるものかと、写真の中の妻を見詰め様としても、その気持ちさえもが霧散してしまう。
「身体に落書きをしてキミとセックスすると、こんなに感じ合えるのね……あぁ、キスマークもまだ残って……本当に愛妻家を奪っている気分よぉ……」

と、女課長は机に転がっていた携帯電話を掴み取った。パスワードロックをしていないそれは、容易に彼女の軍門に下った。手早く操作すると、耳元に近づけてきた。呼び出し音が鳴っている。意図を訊ねようとした時――。

『もしもし、あなた？』

妻の声だ。電話の向こうにいるのは、家で帰りを――きっと、いつ帰宅されても良い様に風呂の支度をし、冷めた夕飯を前に頬杖をついて時計でも眺めていた妻だ。

『もしもし、もしもし？　あなたなんでしょ？』

心臓がバクバク脈動を打つ。

「う、うん」

『まだ仕事場なの？　今日も帰りが遅くなりそう？』

「うん、ごめん。もう少しかかりそうなんだ」

息が詰まる。努力して吸い込み、意識して吐き出す息が酷く荒々しい。

『どうしたの？　息が荒い様だけれど。具合悪いの？』

「浮気セックスをしている最中だって、説明してあげたら？」

耳元で元凶が囁いた。濡れた声で。冷めかけていた背筋に鳥肌がたった。

耳に熱い吐息がかかり、次いで甘噛みされる感覚。たっぷりの唾液でヌメル舌がぬ

ろぬろと耳の円周を往復する。耳のかなりの部分を口に含み、温かな口内でチロチロ舐めて性感を感じさせてくる。

妻との通話中であるにも関わらず、情けない喘ぎを逃がしてしまった。電話の最中でもなかったら、オフィス中にみっともない声を響かせていたかも知れない。

『あなた？　そんなに具合が悪いの？　今から迎えに行くから待っていて』

「ううん。大丈夫。ちょっと熱っぽいだけだから……っ」

続けられなかった。課長が、オンナ上位の責めを始めたからだ。向こう側の妻と会話中の夫のオトコを、自身のぬかるむ肉筒で根元まで咥え込み、グリングリンと腰を回す。足と空いている片手でバランスを保ちながら、ダイナミックに。

肉棒が、ぬるぬるのヒダヒダにより満遍なく擦られる。どの部分も、順次リズミカルに擦り上げられる。

妻と話をしていると言うのに、自分好みの落書きに目がいってしまう。熱が下がらない。跳ね回る長い髪が、元は白かった赤い肌が、自分を見下ろす顔が、性交の相手が妻でない事を自覚させる。黒い悦楽が背筋を駆ける。

『あなた？　ねぇ、あなた？』

電話の向こう側から聞こえる妻の声が、背徳の快感を増大させる。今、自分は妻以

ヤアンッ

外の女性と交わっているのだ。

「……ぁ……本当に大丈夫だから……っ！」

写真立ての中で照れくさそうにしている妻を見詰める時よりも、電話で繋がっている今の方が妻とより近い筈なのに、心配声がどんどん遠ざかっていく。

それに比例して、他の女性と繋がっているものが甘い痺れで満たされていく。灼熱のマグマが、もうそこまで迫っている。

勃起を包み込み女壷の入り口が、どんどんどんどん狭まってくる。根元が気持ち良く締め上げられていく。それに伴い、奥のほうが広がっていく。女課長の紅潮した笑みが深くなっていて――。

ドビュッ！　ビュルルルルッ！　ドクドクドクドクッ！

ビクビクビクビクビクッ！

一番奥のコリコリと、膨張しきった亀頭が深く一つになった時、肉欲のマグマが噴き上げた。女課長のオンナも遠慮なくビクビク痙攣する。それが、更に射精を促す。

とても小さな妻の声が聞こえる。不意に、携帯電話から耳障りな電子音が鳴り始めた。何とか適当な事を言った時、通話が完全に終わった。

軽くて柔かい身体が被さってきた。

「身体がバラバラになったみたい……こんなセックス初めて……」
青息吐息で呟く課長の顔は、とても満ち足りている風に見えた。
「ごちそうさま、奥様……素敵な旦那様ですね……」
写真の中の妻を見詰めながら、そんな事を言う。他にも何か続けた様だが、意識が白んで分からなかった。
「はぁ……」
家の中の電灯が点いている。恐らく、まだ妻が起きていたのだ。ドアを開ければ、当たり前の様に出迎えてくれるに違いない。
失神から目覚めた時、拘束が解かれていた。そして、不謹慎な肉体的充実感に包まれていた。それに反比例して心がとても重苦しかったが、どうにか仕事を済ませた。
妻へ正直に伝えなければならない。そう意識し続けながら家路につき、今に至る。
きっと酷く傷つくだろう。別れ話はこちらから切り出すべきだと思う。不義を働いた男の為に、あんなに素晴らしい女性が一秒でも無駄にしてはならない。再出発を全身全霊で応援しなければ。例え陰からでも。少ない財産もあるだけ全部差し出そう。
やる事を確認してドアノブを捻った。聞き慣れたスリッパの音が近寄って来た。